

【考察】 正常例と比較して重複下大静脈例の下大静脈では左右とも弾性線維が多く、平滑筋が少なかった。圧力の高い動脈では弾性線維が多く、圧力の低い静脈では弾性線維が少ないことから、重複下大静脈例の下大静脈ではより静脈圧が高く、弾性線維が発達したことが示唆された。そのため、重複下大静脈を有する例では下半身の血液が正常例に比べて心臓に戻りにくいことが推察された。

8-2.

新型コロナウイルス感染症流行期における医学生・看護学生の手指衛生実施状況

(医学部医学科 6 年)

○植野大空斗、鈴木 堇

(東京医科大学：公衆衛生学分野、東京医科大学病院：感染制御部)

町田 征己

(手稲溪仁会病院：臨床研修部)

臺 剛一

(東京医科大学：公衆衛生学分野)

菊池 宏幸、井上 茂

【背景・目的】 新型コロナウイルス感染症パンデミックは 2021 年現在も継続している。感染拡大を防ぐためには市民の予防行動の実施が重要である。手指衛生は接触感染予防のための基本的な予防行動である。医学生・看護学生は一般市民より高い水準での手指衛生の実施が期待されるが、その実態は明らかではない。そこで本研究は、新型コロナウイルス感染症流行期における東京医科大学在学中の医学生・看護学生の手指衛生実施状況を明らかにすることを目的とした。

【方法】 本研究は横断研究である。2020 年 4 月 7 日から 9 日に、東京医科大学に在籍する医学部医学科・看護学科学生に対して学内専用ページ上でインターネット調査を実施した。日常生活において手指衛生を実施すべき代表的な 5 つのタイミング（帰宅時、鼻をかんだ後・咳・くしゃみをした後、調理の前後、食事の前、マスクを着ける前と外した後）での手指衛生の実施状況を 4 段階（毎回行えている、だいたい行えている、ほとんど行えていない、全く行えていない）で評価した。毎回行えている、だいたい行えていると回答した者を手指衛生を実施して

いる者と定義し、その実施率を明らかにした。

【結果】 有効な回答を得た 438 名を解析対象者とした。5 つのタイミングでの手指衛生行動の実施率はそれぞれ、帰宅時：89.7%、鼻をかんだ後・咳・くしゃみをした後：39.1%、調理の前後：83.8%、食事の前：73.5%、マスクを着ける前と外した後：56.8%であった。

【結論】 医学生・看護学生においても、日常生活における手指衛生の実施状況は一般市民と同程度であり、改善の余地があった。特に鼻をかんだ後・咳・くしゃみをした後、マスク着用の前後における手指衛生の実施率が低く、手指衛生を実施すべきタイミングに関するさらなる啓発が必要である。

8-3.

動画共有・分析・コミュニケーションツール (SPLYZA TEAMS®) を用いた「医療面接」と「プレゼンテーション (上級医への報告)」教育の実践

(医学教育学分野)

○野平 知良、三苫 博

(教育 IR センター)

油川ひとみ

【背景】 「医療面接 (MI)」と「ショート・プレゼンテーション (SP)」は医学生だけでなく初期・後期研修医から専門医に至るまで臨床に携わる全ての医師にとって必須の能力である。しかし、いずれも効果的な教育方法が確立していないため、各診療科で工夫して実践している現状がある。本学産科婦人科では 2021 年 5 月より動画共有・分析・コミュニケーションツール (SPLYZA TEAMS®) を用いた MI・SP 教育を行ない、同分野における有用性と他の精神運動領域への応用の可能性を認識したので具体例とともに報告する。

【対象・方法】 2021 年第 1 期から 1 回／週の模擬 MI・SP を行い、その模様を撮影し「e 自主自学」にアップロードした。第 V-VII 期 (23 名) は、アップした動画のシーン毎に SPLYZA TEAMS® を用いて学生・教員からのコメントを書き込んだ。模擬 MI・SP は 1 回終了するごとに VSOP モデル (大西) で形成的評価を行なった。以上のデータより

① VSOP 評価結果を点数化 (V = 1、S = 2、O = 3、

P = 4) して SPLYZA TEAMS® 使用の有無による VSOP 評価結果を比較した。② SPLYZA TEAMS® の使用後アンケートから学生の感想を確認した。

【結果】 ① I-IV 期 vs V-VII 期 = 2.3 ± 0.5 vs 3.2 ± 0.6 ($p < .003$) と V-VII 期で点数が有意に高かった。② アンケートでは「SPLYZA TEAMS® を使用してよかった」(100%)「今後の実習・研修に活かせると思う」(92%) など好意的な意見が多かった。

【考察】 SPLYZA TEAMS® による MI・SP の教育は、実習のシーンごとに教員からのフィードバックやグループ・メンバーの動画を参考にすることで復習しやすく、他の技能学習への応用の可能性が示唆された。

8-4.

授業後に学生が記述した「性的マイノリティについて医学生が学ぶべきこと」を分析しカリキュラム改善に生かす

(八王子：リウマチ科)

○青木 昭子

(八王子：総合診療科)

山口 佳子

(医学教育分野)

原田 芳巳

【背景】 医学教育コア・カリキュラムには「ジェンダーの形成並びに性的指向及び性自認への配慮方法」が含まれているが、学修内容は各大学に任されている。東京医科大学医学科では 2014 年から「医療プロフェッショナリズム」の中で、2 年と 4 年に LGBT に関連する内容を講義している。医学科 4 年生を対象に 2021 年度オンデマンドで実施した授業「多様性に対応できる医療を考える」の課題「LGBT や性の多様性をどのように学ぶべきか」に対する学生の記載を解析した。

【授業の内容】 トランスジェンダーの支援団体の代表も務める泌尿器科医師と内科医が性同一性障害と医療について講義した。

学生が必要と考える学修：e-自主自学に入力された 109 人の記載を解析した。(1) 望ましい学習の時期について (86 人が記載)：70 人が低学年 (1・2 年) で学ぶべきと記載し、そのうち 14 人は入学後早期に学ぶべきと記載していた。14 人が実習開始前、6

人が実習中の学修を提案し、58 人は複数回の学修を、18 人は 1~6 年まで各学年で学修するとよいと記載していた。(2) 学修の内容について：56 人が LGBT 当事者の授業参加を提案していた。具体的には「日常生活における悩みや体験を話してもらう」「グループワークに参加してもらって意見交換する」などの記載があった。当事者の参加は難しいだろうと、インターネットの動画や映画の利用や、当事者ではなく LGBT の支援者や対応している医療者の参加を提案する学生もいた。(3) 学修の方法について：正しい知識を得るための講義や当事者から話を聞く、に加え、グループワーク、医療面接などのロールプレイをするなど複数の学生がアクティブラーニングを提案していた。

【結語】 多くの学生は LGBT を学修する必要性や意義を感じ、能動的な学修を希望していた。授業の形態を工夫し、より効果的な学修を考えていきたい。

8-5.

院外心停止に対して ECPELLA で救命し社会復帰を果たした 1 例

(救急・災害医学分野)

○会田 健太、東 一成、石井 友理、
鈴木 彰二、澤島 摩那、織田 順

【背景】 心原性ショックに対して、VA ECMO (venoarterial extracorporeal membrane oxygenation) と Impella を併用する治療法 (ECPELLA) の有効性が近年報告されている。しかし、院外心停止患者に対する ECPELLA の有効性やエビデンスは未だ十分ではない。今回我々は院外心停止患者に ECPELLA を導入し救命した症例を経験したので報告する。

【臨床経過】 60 代男性。歩行中に路上で倒れた。目撃者により一次救命処置が施行された。救急隊接触時、初期波形は VF (ventricular fibrillation) であった。発症から病着までは 47 分であった。二次救命処置を施行し病着から 10 分後に自己心拍が再開した。心原性ショックの状態は持続しており、IABP (intra-aortic balloon pump) を導入後に PCI (percutaneous coronary intervention) を施行した。PCI 中に VF となり、ECPR (extracorporeal cardiopulmonary resuscitation) を施行した。VA ECMO と IABP を併用しても循環動態は破綻していた。順行性の補助循環を付加する